

川崎大師の石造物調査と体験型学修プログラム

国際日本学部 角南聡一郎

川崎区誌研究会との出会いは、2021年度の民俗調査実習で川崎大師（金剛山平間寺、真言宗智山派大本山）所在の石造物の見学を計画した際に、何か参考となる文献はないか調べたことに始まる。検索の結果、同会の石造物調査部会の一員である金井晃先生を中心として、2008年から2011年にかけて境内石造物調査がなされ、2014年に報告書が刊行されていることを知った（金井晃ほか2014『川崎大師石造物調査報告書』川崎区誌研究会）。そこで、同会会長の小泉茂造先生に電話連絡をし、報告書の入手方法と民俗調査実習へのご協力をお願いした。そして、11月7日に小泉・金井両先生に川崎大師の石造物をご案内いただいたのである。

川崎大師で、両先生に今後の角南ゼミの学生と川崎区誌研究会との交流の可能性について、相談をさせていただいた。金井先生によれば、前回の報告書に収めきれなかった資料や石造物の移動などがあり、補遺編を作成したいという考えがあるとのことであった。同会は長く郷土川崎について調査してこられた、シニア世代が



川崎大師での現地調査の様子

中心である。しかし、同会の活動は、近年のデジタル化の波には十分に対応できておらず、コロナ禍で活動は休止中であるという。一方で大学生には調査研究の経験は未だないものの、デジタルネイティブ世代として教員やシニア世代よりもはるかに、デジタル化社会に適応して情報の整理や発信をするリテラシーが備わっている。これら異なる世代が、同じ対象について調査をおこない情報を蓄積するということは、相互補完的関係となりうることで、協力して調査報告書を作成することが、可能となるのではなからうかと考えた。

金井先生は、これまで多くの石造物調査を実施し、成果を公表してきた在野の研究者である（金井晃1980『倉淵村の道祖神』金井道祖神研究所、金井晃1982『神奈川県道祖神調査資料集1』金井道祖神研究所、金井晃1985『鶴見石工の系譜』『日本の石仏』33 pp.51-60など）。金井先生にご案内いただいた民俗調査実習履修生2名が、2022年度より角南ゼミの所属となった。両名は実習で習得した調査方法を参考としながら、自らの研究テーマに取り組んでいる。こうした結果からすれば、学生たちは金井先生の詳細で熱のこもった石造物の解説に、心を打たれたのではないかと思われる。

2021年度から神奈川大学「体験型研修」の新規プログラムの開発に伴うプロジェクトがスタートし、角南はこれに参加している。2023年度を目標に共通教養科目の一つとして「体験型研修」の授業を開講すべく、石造物関係の授業準備をおこなっている。石造物を対象とするのは、調査を通じて地域の歴史や文化を知ることができること、他の文化財と比して石造物が調査しやすいことなどがあげられる。そこで角南ゼミ

ナールでは2022年度より、金井先生にご指導を仰ぎ、「体験型研修」の新規プログラム開発の予備的作業も含めて、川崎大師石造物の補遺調査を実施することとなった。我々からの調査のお願いに対して、川崎大師は快く許可してくださった。

2022年6月11・12日から土日などを利用して、角南とゼミ生は金井先生とともに調査を開始した。期間は1年間で予定している。当日は、NPO法人かわさき歴史ガイド協会の副理事長藤田智恵子氏も参加された。同協会は現在、川崎大師境内の歴史ガイドを担当されている。藤田氏からガイドする際に、境内石造物のガイドブックのようなものがあれば便利だという話題が出た。報告書が刊行されれば、それをもとにガイドブックを作成することも可能ではないかと考えている。この調査を契機として、文化財調査に留まらず、その活用も視野に入れてゼミ活動を進めていきたい。いずれにせよ、金井先生をはじめとして、協会の皆様、川崎大師の皆様にお世話になりながら、調査を継続していく予定である。

国際文化交流学科観光文化コース 演習「ことりつぷ」

―軍港・横須賀を“観る”―

国際日本学部 国際文化交流学科 3年
(高井ゼミナール) 春田 菜々美・

石塚 あかり・波辺 真由・酒井 那実

【はじめに】

国際文化交流学科観光文化コースでは2年次の「コース演習Ⅰ」で「ことりつぷ」と称したフィール

ドワークを4クラスがそれぞれ行います。高井先生が担当するクラスでは高井ゼミナールの3年生がサポートメンバーとして参加しました。今回のテーマは「軍港・横須賀の今昔を観る」そして、写真紀行書を作ることが最終目標です。ことりつぶ当日は軍港めぐりクルーズを体験した後、ホテルメルキュール横須賀で食事を取り、東京湾唯一の無人島である猿島を訪れました。

【軍港クルーズ】

軍港としての横須賀の誕生は、ペリー来航以降、横浜の開港とともに様々な人たちが日本へやってくる中、東京湾の守りを固めるために造船所が作られたことがきっかけになっています。軍港めぐりクルーズでは、船の左右に次々あらわれる日米の艦船を見ながらガイドさんが歴史や船の説明をしてくれます。ガイドさんによると、軍港クルーズは観光客だけではなく横須賀市民のみなさんにも愛されているそうで、ことりつぶ当日の日曜日も幅広い年齢層の方々が乗船していました。横須賀本港はアメリカ軍の敷地であり、異国情緒が感じられました。軍港に馴染みのない人にも分かりやすいようガイドさんが説明してくださったの



横須賀軍港めぐりにてクルーズ船から見た艦船

で、軍港についての知識を実物を見ながら得ることが出来ました。何より、間近に見る各種艦船の迫力に圧倒された45分間でした。

【ホテルメルキュール横須賀】

横須賀市民も多く利用するホテルメルキュール横須賀の最上階レストランから米軍基地や軍港を眺めながらコース料理を頂きました。当日もレストランには多くのお客様が訪れていました。同ホテルは、米軍関係者の出張利用、そして地域住民のみなさんの利用によって、コロナ禍でも業績に大きな打撃を受けなかつ

たそうです。昼食後

は普段はなかなか見ることができないホテルのバックオフィスを見学させていただきました。私たちにとっては、観光業の舞台裏を知る貴重な機会だったと思います。



総支配人の猿山新二さんとスタッフの齋藤桂子さん、2年生、3年生

【猿島 島内ガイドツアー】

猿島は明治期に作られた要塞と手つかずの自然が残された、東京湾唯一の無人島です。ガイドさんの説明を聞きながら島中を散策して「見る」だけでは「観る」ことのできない観光を楽しむことができました。要塞跡が残る自然豊かで魅力的な猿島を後世まで守り続けていくと同時に、横須賀市が抱える財政難を考えれば猿島の観光事業推進も重要です。両方のバランスをと

りつつ、観光地化の推進によって生まれる新たな課題

【おわりに】

「見る」と「観る」の違いは何でしょうか。それはただモノを「見る」一方で、そのモノが持つ意味を知った上で「観る」という違いがあります。今回の高井クラスのコース演習では「観る」をテーマにした上で、軍港・横須賀のさまざまな姿を「観」ました。観光業界にも興味がある学生たちが、ある場所を「観る」視点を持つことは大切なことだと考えます。3年生は2年生の時に参加者側としてことりつぷに行きましたが、今回はサポート側として、しおり作成や現地での誘導を行い、引率教員の大変さを知ることでもできました。また、軍港めぐりと猿島で、それぞれ専門的知識とともにエンタテイメント性を併せ持つガイドさんに案内をしていただき、観光客が「観る」観光を実践するために、ガイドという職業が重要な役割を果たしていることを実感しました。学生のなかには将来的に観光業界でお客様をガイドする仕事に就く人がいるかもしれません。その点からも、現地に赴いたからこそその発見が生まれた「ことりつぶ」の一日でした。



明治時代に使われていた要塞と手つかずの自然に囲まれている